創刊115

紘細表現

金沢21世紀美術館で開催中の北國新聞創刊一一五年記念第三十九回目展金沢展（社団法人目展、北國新聞社、富山新聞社など主催）は十一日、会期残り一週間を切り、週明けの平日ながら大勢の愛好者が詰めかけ、繊細な表現に感動する輪が広がった。

日本画の作品解説では、昨秋の本展で二回目の特選を射止めた戸田博子さんが担当した。戸田さんは、岩絵の具やニカワの実物を示しながら油絵との違いなどを説明した上で、展示作品について「風景の中に作者の心が投影されている」「いろんな視点や構図を考え、下絵を何枚も描いている」などと制作の舞台裏を紹介した。

このほか作品解説は、洋画を目展会友の松下久信さん、彫刻を目展評議員の山瀬晋吉さんが務めた。

開場は午前九時半、閉場は日曜、木曜が午後八時、（入場は閉場三十分前まで）となっている。十八日まで。

次回の作品解説

◇14日午前10時半 工芸美術（井波唯志）▽午後1時 書（高廣悠悠）

「お旅」曳山 雄姿再び

美川仏壇の技生かし

小松・寺町 屋根修復 輝く金箔

修復された曳山 ＝小松市寺町

昨年のお旅まつり期間中に屋根の一部が破損し、修復作業が進められていた小松市寺町の曳山の組み立てが十二日完了し、損傷以前と変わらない雄姿を現した。同町で曳山が受け継がれて二百十年余り。美川仏壇の職人の協力を仰ぐ「よみがえった曳山に町民は安堵し、あらためて継承を誓った。

寺町の曳山は昨年五月、収納していた屋根が突風で倒壊し、屋根の一部を破損した。曳山は釘を一本も使わない技法で造られており、美川仏壇と特徴が同じであることから、町は北島仏壇店（白山市）の北島昭浩さんに修理を依頼。北島さんは反りなどを微調整しながら屋根の一部部材を新調し、漆塗りや金箔の装飾を施した。

破損後の組み立ては初めてとなったが、修繕部分が大聖寺藩十代藩主前田利極（なりきわ）の正室から四隅につける装飾品「宝鐸（ほうたく）」が贈られたと伝わる。

小松市内には寺町など八町に藩政期から伝わる曳山が一基ずつ保存され、十四日から十八日までのお旅まつり期間中、各町で展示される。十七日の曳山八基曳揃（ひきぞろえ）では、JR小松駅前に八基が勢ぞろいする。

（寛政十年ごろに登場し、

寺町の曳山は一七九八

存会の徳海新哉委員長は「元通りになってほっとした。立派になった曳山をこれからも守っていきたい」と話した。

（北國新聞
催）の応援
三人は「
もまれな
年間を乗
い」と期待
薬草観
参加者
金大が
金大附属
能登の薬草
ム（本社
月十一日
の二日間、
開かれ、同
日の野外薬
参加者を募
る。
観察会は
からで、湯
を散策し、
草の正しい
指導する。
で参加費は
合わせは金
＝076（
491－まで
は十八日。
31日に
三十二日
から金大角
スの研究科
会と研究報
され、東大
物館の池田
講演する。
遺伝子治
現状に
金大で
金大の北
ソトープ研
は十二日
部十全講堂
た。鳥取大
系研究科の
授が「遺伝
療を目指し
学技術開発